ACT

Art, Culture, Tradition

50

［発行］札幌市教育文化会館
アクト第50号

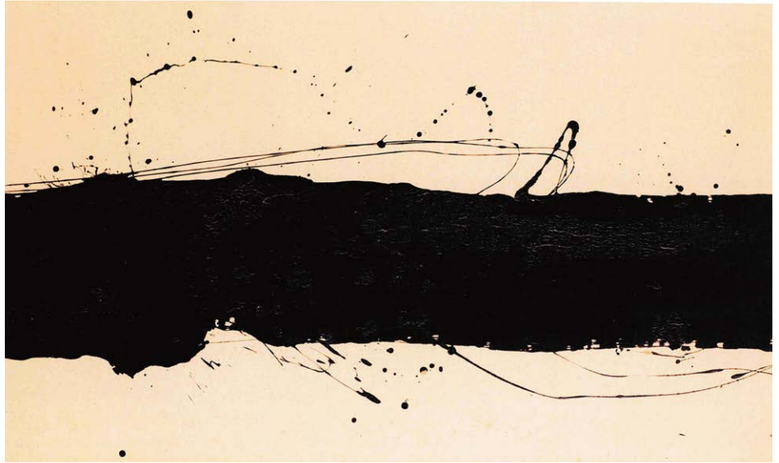
MAY 2025

書家

中野北溟

書家　中野北溟

日本では誰しも学校の授業で習う書道。特別な道具を使う書道にワクワクした記憶がある人も多いのではないでしょうか。そんな授業で教わる書道は、いかに美しい文字を書くかが重要でしたが、その先には文字を通して様々な世界や人々の営みを表現する奥深い表現の世界が存在します。書く人が文字と対峙することによって千変万化する書という表現。そんな書の世界で北海道を拠点に活躍を続け、日本を代表する書家、中野北溟。今回のACTでは北溟さんによる書の世界の一端をご紹介します。



一　（1961年）

2013年 札幌美術展「アクアーライン」 図録より

中野北溟初期の代表作と言われるこの作品は、タイトル通り漢数字の「一」と読めると同時に、大胆に紙をはみ出して描かれたそれは、あたかも海面のうねりのようにも見え、墨を散らして描かれている部分は波しぶきを想起させます。読むことができる文字であると同時に、世界の一部を垣間見るかのような迫力のある作品です。

海の音　（2005年）

2013年 札幌美術展「アクアーライン」 図録より

自身作の文句「ごうごう海の音をきく」が書かれた作品。墨がすくなく、にじみを効果的に用いており、見る人によって様々な情景を思い起こさせてくれる作品です。幼少期を焼尻島で過ごし、海に囲まれた環境で育った中野北溟さんは「制作の根底には必ず海、海鳴りのイメージがある」と言うほど、海を主題にした詩文を数多く書いています。

天空海闊　（2016年）

2016年 第52回 創玄展 出品作品

唐の詩人、元覧の詩句が語源と言われるこの言葉は「空は高く海は果てしなく広がっているように、心が広大で、物事にこだわらないさま」を表現しています。自身も空や海のようにおおらかな心をもって書いたというこの作品からは、広大な自然の豊かさに対面したときのように、その優しさと厳しさ両方を感じます。

書 家

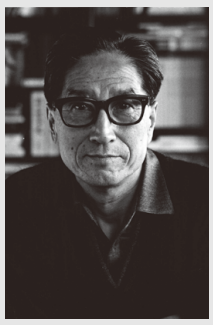
中野 北溟

筆と墨を使い紙に文字を書き表現をする日本の伝統文化「書道」その世界を一線で走り続ける芸術家、中野北溟

近代の詩や俳句を題材に書を描く近代詩文書を主戦場とする中野北溟さん。
北海道に根ざし、北方の世界を紡ぎ続ける書家とはどんな人なのでしょうか。

PROFILE

1923年（大正12年）生まれ　北海道羽幌町焼尻島出身の書家。天彗社会長、全国書美術振興会顧問、毎日書道会最高顧問、創玄書道会最高顧問、全日本書道連盟顧問などを歴任。近代詩文の父と呼ばれる金子鷗亭に師事。学校卒業後、中学校の教職員となり教頭・校長まで歴任するが周りの強い要請を受け早期退職し書の道へ入る。東京進出の機会は何度もあったが生まれ故郷の北海道を愛し、近代詩文を中心に作家活動を続けている。その作品は深い芸術理念を持ち、全国的、国際的にも高く評価され、書道界の推進役として幅広く活躍。札幌や北海道のみならず、日本の文化芸術の進展に大きく寄与している。



書家 中野北溟の誕生

1923年（大正12年）焼尻島で生まれた中野北溟さん。彼が書に興味を持ったのは、小学校教師を目指し北海道第三師範学校（現・北海道教育大学旭川校）に通っていた頃。小学校では書も教えねばいけないと言われ習い始めたのがきっかけでした。終戦後、学校に入り直した北溟さんは同学校の書の先生である赤石蘭邦氏から書について学んでいきました。そんなある時、北海道出身ながら東京で書道の第一人者として活躍する金子鷗亭氏の存在を知り、自身の書を見てもらおうと送ったところ、丁寧な批評とともに「北溟と号せよ」と書いた手紙を受け取りました。これをきっかけに、書を本格的にやるか決めかねていた彼は当時行われていた公募展「日書展」に出品することに。落選したらやめようと考え出品したところ見事入選。他の公募展でも数々の評価を受けたことで、書を本気で続ける決意をしました。書家 中野北溟はこうして誕生したのです。

師である金子鷗亭と近代詩文書

師と仰ぐ金子鷗亭氏からは直接指導を受けたわけではありませんでした。しかし書に関する多くの刺激は「鷗亭先生が言葉で与えてくれた。」と北溟さんは言います。そんな金子鷗亭氏は近代詩文書の提唱者でした。戦前までの書の世界では、中国の漢文を書く「漢字」と、日本独自のカナを書く「仮名」とに分かれていました。「誰でも読める現代語で書かれた書を」と金子鷗亭氏が発案し、現代文や詩歌を題材とする新しい表現として近代詩文書は生まれました。主たる題材を近代詩文書とする中野北溟さんにとって、そういった意味でも師であるのでしょう。

中野北溟が描く近代詩文書の世界

中野北溟さんが描く近代詩文書は出身地・北海道への深い愛情が作品に色濃く表れています。河邨文一郎氏や原子修氏といった北海道を代表する詩人の詩を題材とした作品も数多く手がけてきました。また、故郷である焼尻島での原風景を背景に、海や自然、それらがもたらす静寂をテーマにした作品も多く生み出してきました。こうした作品は国内にとどまらず海外で発表され、名だたる美術館に収蔵されるなど高い評価を受けています。

書の巨人 中野北溟

様々な人や土地の影響を受けながら作品を生み出し続けてきた中野北溟さんは、札幌を拠点に書道団体「天彗社」を設立。そのほか毎日書道会最高顧問、創玄書道会名誉会長、全日本書道連盟顧問、日展審査員など、数々の要職を歴任。後進の育成にも力を注ぎ、日本の書文化の発展に貢献しています。今年で102歳。近代における書の世界を第一線で歩み続けた彼は、まさに日本書道界の生ける伝説であり、現在も現役で創作活動を続ける探求の人と言えるでしょう。

書から知る、言葉の世界

自身の感性と響き合う詩作を多く作品として発表してきた中野北溟さん。
書として描かれた作品を味わうことは、同時にその言葉を生み出した芸術家を知ることにも繋がります。
ここでは北溟さんが多く取り上げた北海道を代表する言葉の芸術家達をご紹介します。

河邨 文一郎（かわむら ぶんいちろう）

1917年小樽市出身。詩人かつ札幌医科大学教授としても活躍。自身の暮らす北方性に目を向けた作品を多数発表。また、科学的思考と詩的感性の融合を追求した先駆的な作品でも注目され、現代においても示唆を与える作品を多く残しました。詩誌「核」を主宰し、北海道詩人協会の会長を務めるなど、北海道の詩壇に多大な貢献をしました。

原子 修（はらこ おさむ）

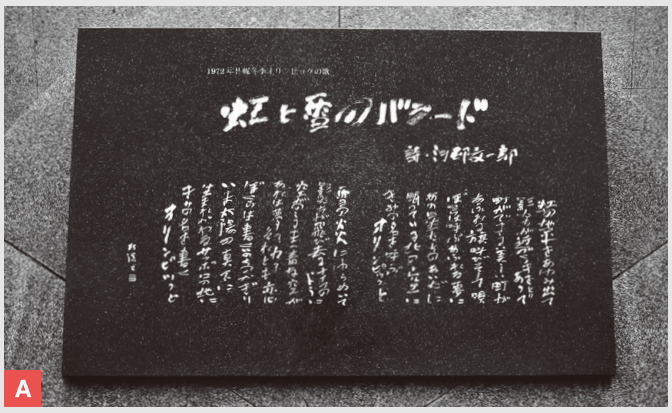
1932年函館市生まれ。詩人。北方の自然や縄文文化などを雄大にうたう作品で道内詩壇をリードしてきました。北溟さんも書いた「叙事詩 原郷創造」は人類の始まりから現代に至るまでを壮大なスケールで描いた作家の集大成ともいえる大作です。また数多くの詩劇も創作しており、国内に留まらず海外でも公演が行われてきました。

源鬼彦（みなもと おにひこ）

1943年樺太生まれ。俳人。北海道の自然や開拓精神を重視した作品を多く発表してきた作家です。厳しい気候や大地に生きる命の息遣いを繊細にとらえ、開拓精神や季節感を重視した句が多いことが特徴です。北海道で暮らし、地域の人々と交わっているからこそ生み出される言葉の数々は、多くの人に北国の世界観を伝えています。

街中で出会える中野北溟作品

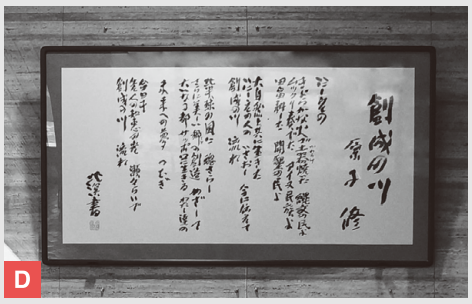
色々な場所で出会うことができる作品の一部をご紹介します。



A

B

C



D

A）大倉山ジャンプ競技場に設置された1972年札幌冬季オリンピックのテーマソング「虹と雪のバラード」詩碑。作詞は河邨文一郎氏。　B）札幌市資料館（旧札幌控訴院）入口にかけられた看板。この建物は2020年に国の重要文化財に指定されました。　C）悠然と流れる石狩川の記念碑。石狩川の碑銘の横には、原子修氏による石狩川の詩が刻まれています。　D）原子修氏による「創成の川」。札幌市役所1階ロビーに飾られている中野北溟氏の書を原本に、創成川沿いに詩碑が立てられています。

数々の名作が間近に見られる 中野北溟記念室が教育文化会館にオープン

中野北溟記念室オープンに際し記念式典が開催

中野北溟さんが自身の書作品731点を札幌市に寄贈したことを受け、札幌市教育文化会館2階に『中野北溟記念室』が2025年4月18日にオープンしました。記念室では寄贈された作品から、約1年ごとに作品を入れ替えて展示を行っていき、北溟さんの多彩な作品世界を広く皆さんにご堪能いただける場が誕生しました。前日にはオープン記念式典が開催され、多くの関係者や報道陣が見守るなか北溟さんご本人からもお言葉をいただきました。また、秋元克広札幌市長からも心のこもった祝辞が述べられ、和やかな雰囲気の中でテープカットが行われました。式典後にはさっそく多くのファンが訪れ作品を鑑賞する姿も。今後も多くの方に気軽に北溟さんの書作品と触れ合える場として愛され続けるよう、皆様のお越しをお待ちしています。